

琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき

かりまた, しげひさ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012508>

琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき

かりまたしげひさ

1. はじめに—琉球列島における言語接触

日本語の諸方言は、琉球列島ではなされている琉球方言と、吐喝喇列島^{とから}以北の地域で話されている本土方言とに二分される。両方言間の言語差はおおきいが、両方言は共通の祖先から分岐した兄弟である。服部四郎（1955）は基礎語彙統計学の方法によって琉球方言と本土方言が約2000年前から1450年前のあいだに分岐したと推定している¹⁾。

琉球方言は、しかし、日本祖語から袂をわかったのち、本土方言から孤立して現在にいたっているわけではない。琉球方言は、たえまない大小の交流のなかで本土方言からさまざまな影響をうけている。また、琉球国時代に中国との交流があり、中国語の影響もうけている。琉球列島内の交流もあり、その言語接触のあとをみることもできる。

さまざまな言語接触が琉球方言に言語的な影響をもたらしている。必ずしも人の移動をともなわない言語接触も想定できるが²⁾、おおくは、人の移動にともなうものであり、大規模な人の移動、あるいは小規模の人の移動があった。

琉球列島にはすくなくともつぎのみつつのおおきな言語接触があったとかがえる。

- I 日本祖語を保持した人々の琉球列島への移動にともなう言語接触。
- II 1609年の薩摩侵略以降の人の移動にともなう言語接触
- III 近代以降の日本国への併合と人の移動にともなう言語接触

近代以降の日本語標準語との接触は、琉球方言にもっともおおきな影響をあたえており、その影響は、琉球方言の存在そのものをおびやかすほどのものである。しかし、最初の言語接触、すなわち、日本祖語を保持した人々の移動は、琉球方言と本土方言との近似性を考慮するなら、そこには先住民の言語=基層語と日本祖語との混ざり合いを想定できるほどの接触ではなく、基層語の痕跡をわずかにとどめるだけで、日本語に完全におきかわるものであり、港川人の子孫、あるいは、縄文系の文化を保持した人々、あるいは、その言語をふくめた文化を駆逐するようなものであったろうとかがえる。また、南下してきた人々が保持していた言語も奈良地方などの中央語ではなく、おそらくは西南九州にあった

-
- 1 服部四郎（1955）以降、日本祖語（あるいは九州祖方言）からの分岐の時期についての議論はなく、いろいろな面で研究の進展した現段階で祖語からの分岐時期について再検討をおこなう余地はあろう。
 - 2 人の移動によらない言語接触には、漢文、和文など書きことばや教育を媒介にした言語接触や、ラジオ、テレビなどのメディアを媒介にした言語接触があろう。

言語であったはずである。

琉球列島でどのような言語接触がおきたか、おもいつくまを以下1～5に列挙する³⁾。中央語としての那覇・首里方言と地方語（周辺方言）の接触（4）と地方語と地方語の言語接触（5）は、いずれも地方語同士のものだが、下位方言間の方言差がおおきい琉球方言を考慮するなら、地方語同士の言語接触=方言接触（以下では便宜的に方言接触とする）とはいってもおおきな葛藤と軋轢をうむものであった。琉球列島の多言語的な状況は、近代以前から存在していたといえる。

1. 本土諸方言との接触

1-1 近代以前の人の移動

1-1-1 和語の借用

1-1-2 日本漢語の借用

1-1-3 日本外来語の借用

1-2 近代以降の人の移動

1-3 大東島への八丈島方言母語話者の移住（八丈島方言と沖縄方言の接触）

1-2 和文の学習（文献を介した接触）琉歌語など雅語の借用

1-2-1 標準語の学習（教育を介した接触）

2. 中国語との接触

2-1 琉球人の中国への渡航および帰国

2-2 中国人の琉球への渡航（使者などの渡航、中国人の帰化）

2-3 中国文献の教育（教育による文献を介した接触）

2-4 戦後の台湾移住者の中国語との接触

3. 外国語との接触

3-1 琉球国末期の通事と外国人との接触

3-2 戦後の米軍占領下の英語との接触（一部語彙の借用）

4. 中央語としての那覇・首里方言と地方語の接触

4-1 王府役人の地方への派遣

4-2 那覇・首里士族の地方への移住（屋取）

4-3 地方役人の那覇への渡航

4-4 地方出身者の沖縄島那覇への移住

5. 地方語と地方語の接触

3 琉球列島以外における琉球方言の言語接触には、ハワイにおける琉球方言と琉球クレオロイドと英語の言語接触、南米における琉球方言と琉球クレオロイドとスペイン語（あるいはポルトガル語）の言語接触がある。ハワイや南米では上記3言語のほかに他の日系人の日本語（広島方言など）をくわえた4言語の接触もおきている。琉球列島から本土各地に移住した人々の言語接触もある。

- 5-1 石垣四箇方言と周辺集落、離島の方言の接触
- 5-2 平良方言と周辺集落、離島の方言の接触
- 5-3 高野における水納島方言、大神島方言と宮古島方言の接触
- 5-4 久米島における鳥島方言と久米島方言の接触

近代以前の言語接触（上記Ⅰ）と近代以降の言語接触（上記Ⅲ）は、次の点で性格がおおきくことなる。

- 1) 近代以前の言語接触は、特定の個人（役人、商人、船乗り）を介した言語接触で、接触の範囲もせまく規模もちいさく接触期間もみじかく、母語（母方言）＝第一言語への影響もちいさかった。
- 2) 近代以降の言語接触は、琉球列島全域でおこり、住人全員の言語生活に影響をあたえ、その言語接触は長期にわたり、琉球方言の存在をおびやかしている。
- 3) 近代以降の言語接触によって母語とも第二言語＝獲得言語ともことなる第三の言語変種＝接触言語が発生している。
- 4) 近代以前（特に琉球国時代）の借用語は琉球方言の音韻体系に適合させられたり、琉球方言内部でおきた音韻変化を適用させられたりしたが、近代以降、とくに戦後の借用語は、日本語の単語の語形がそのままの形式でとりこまれ、音韻体系への影響がみられる。

高木千恵（2010）は、言語接触による言語変化を運用面からつぎのよっつにわけている。

- (A) 言語交替型：地域語の使用領域が次第に失われ、標準語が、日常生活のすべての領域において使用される言語となる
- (B) 二言語併用型：地域語と標準語とが使用領域を分けあい、ともに使用される
- (C) 言語混交型：地域語と標準語とが混ざりあい、それが日常生活のすべての領域をカバーする言語として使用される
- (D) 言語維持型：標準語の使用が書きことばのみにとどまり、話しことばにおいては地域語のみが使用される

高木千恵（2010）は、従来の研究が（A）言語交替型をとる立場からのものがおおく、（B）言語維持型は言語交替の前段階に、（C）（D）は言語交替の過渡期的段階にあり、標準語化の一元的な説明であったのだが、実際には、東北ではバイリンガル化（上記（B））が、関西では関西方言の言語維持（上記（D））がおきていて、必ずしも一元化が進行しているわ

けではないこと、これまでとはことなる研究のアプローチが必要であることを説いている。

近代以前の琉球列島の地域社会の言語的な状況は、おそらく（D）の状態であり、日本語の影響は、主として借用語という形であらわれたとかがえる。近代以降は、（B）と（C）の状況が進行し、次第に（A）に移行しつつあるとかがえる。

地域社会に生活する個人を高木千恵（2010）になぞらえてみる。なお、高木千恵（2010）にはなかった（E'）をくわえた。標準語を後述の琉球クレオロイドとおきかえてもいいし、時代によっては本土方言とおきかえてもいい。また、下位方言間の方言差がおおきい琉球方言内にあつては、宮古、八重山の下位方言に那覇・首里の中央方言をくわえた三言語併用を想定することもできるが、複雑になるので、本稿では省略する。稿をあらためて詳述する必要があるかもしれない。

- （A'）日常生活のすべての領域において標準語を使用する人
- （B'）地方語と標準語の使用領域を分けて使用する人
- （C'）地方語と標準語をすべての領域で使用できる人
- （D'）限定的に標準語を使用し、日常生活のすべての領域で地方語を使用できる人
- （E'）すべての領域において地方語を使用する人（標準語しか話せない人）

近代以前の琉球社会では（E'）が圧倒的多数で、（D'）がインテリの一部に限定されていたとかがえる。いまでは、（E'）はおらず、（D'）（C'）も稀である。（B'）が減少し、（A'）が増加して多数をしめている。さまざまな言語能力の人が混住しているはいるが、やはり標準語化は進行しているとみられる。

屋比久浩（1987）は、「個人語の理解領域と表出領域における両語の相対的な頻度を日本語は「J、j」、沖縄方言は「R、r」で表し、それぞれ大文字は相対頻度の高い場合、小文字は低い場合を表」して、つぎのような表にまとめている。

| 類 | 理解領域 | 表出領域 |
|---|------|------|
| 0 | R・R | R・R |
| 1 | R・j | R・R |
| 2 | R・j | R・j |
| 3 | J・R | R・j |
| 4 | J・r | J・r |
| 5 | J・r | J・J |
| 6 | J・J | J・J |

屋比久浩（1987、p.120）

屋比久浩（1987、p.119）は、標準語化をつぎのようにのべる。

日本語と沖縄方言の接触が始まってから約百年がたち、現代の沖縄はもう日本語への転移のプロセスの最終段階にきているとかがえるのが妥当であろう。つまり、1870年代末期から今日までの間に、沖縄方言の単一言語話者（モノリンガル）の社会が、日本語の単一話者の社会への変化をなし遂げようとしているのである。

具体的な調査をおこなっておらず、調査時に地域の人たちとの接触のなかでの印象からの推測の域をでないが、0類、1類の人はおらず、80歳以上の高齢者に2類と3類の話者がおり、5、60代以下の世代に3類、4類がふえ、30代以下のわかい世代では5類、6類が圧倒的多数をしめているのではないかとかがえる。

言語接触のおこなわれた個々の現場、すなわち、個人にあっては、母語に第二言語の影響がでるし、獲得した第二言語にも母語の影響があらわれる。第二言語にあらわれる母語の影響が個人的なものではなく、母語話者集団に共通の特徴を有し、世代をこえて継承されて固定化され、言語が混交していく過程で母語（琉球方言）の影響をうけた、第二言語（日本語）ともことなるあらたな言語として接触言語が発生する。

琉球方言話者の第二言語＝本土方言に琉球方言の影響のあらわれた接触言語を琉球クレオロイドとよぶ⁴。奄美地方の琉球クレオロイドの俗称がトン普通語であり、沖縄地方の琉球クレオロイドの俗称がウチナーヤマトウグチである。宮古地方の接触言語や八重山地方の接触言語をさす俗称はない。琉球クレオロイドの下位タイプは、琉球奄美クレオロイド、琉球沖縄クレオロイド、琉球宮古クレオロイド、琉球八重山クレオロイドとよぶ。

琉球クレオロイドは、文法的特徴、音韻の特徴からみて日本語の変種である。標準語との接触が長期にわたり、教育やマスメディアなど標準語の影響のおおきさのゆえに、琉球クレオロイドにふくまれる琉球方言の影響・特徴がうしなわれ、琉球クレオロイドの標準語化＝脱クレオロイド化も進行しているとみるべきであろう。したがって、琉球列島においては、伝統方言の変容、消滅だけでなく、琉球クレオロイドの標準語化も進行しており、一元化を想定しなければならない状況にあるとかがえる⁵。

琉球列島内にあらわれる二言語併用（バイリンガル）は、伝統方言と琉球クレオロイドのバイリンガルである。宮古地方、八重山地方から沖縄島へ移住した人のなかには、宮古

4 かりまたしげひさ（2008）では「琉球クレオール」とよんだが、ロング・ダニエル（2009）にしたがって、「琉球クレオロイド」の名称を使用する。

5 琉球列島における一元化は進行していて、その観点から琉球方言は消滅危機方言に位置づけられるのであり、八丈島方言をはじめとする本土方言のなかにも同様の方言は存在するとかがえる。高木千恵（2010）は、そのことを否定するものではなく、日本語諸方言の多様な状況を説いたものとかがえる。おおくのマイノリティ方言が消滅の危機にあることから目をそらさないよう注意しなければならない。

方言（あるいは八重山方言あるいは与那国方言）と沖縄方言と琉球クレオロイドの三言語併用者もいる。

2. 言語接触による言語の構造の変化

言語接触の過程で日本語・本土諸方言、他地域の方言の影響が母方言の音韻、文法、語彙の各面にさまざまな形であらわれるとかがえられる。また、各地域の琉球クレオロイドに母方言の影響があらわれる。しかし、近代以前の琉球方言と日本語・本土諸方言の言語接触についての研究がほとんど未着手の状況ではどのような影響をあたえたのか、とくに、音韻体系や文法体系にどのような影響あたえたのかについては不明なことばかりである。ただし、語彙については、言語接触のあとを漢語、外来語などの借用語にみることができる。3節でややくわしくのべる。

近世期の琉球国においても琉球クレオロイド、あるいはピジンの発生していた可能性はあるが、それは個人レベルのもので、琉球クレオロイドとよばれるような固定化したものではなかったのではないかとおもわれる。

2.1 音韻への影響

伝統的な琉球方言の音韻体系にあらわれる影響・変化としてさまざまなものがかんがえられる。これも気がついたものを列挙する。以下にあげる構造の変化は、臨地調査のうちに気がついたもので、それを目的にした調査でもないし、一定程度の量のデータがえられているものでもない。体系的でもなく、きわめて概括的なものである。今後の詳細な調査、研究がのぞまれる。

2.1.1 琉球方言の音韻への影響

近代以前の琉球方言の音韻にどのような影響があったか現段階では不明である。しかし、琉球方言と日本語の接触が一部の少数の人々の間に限定的にしかおこなわれていなかったこと、接触の期間なども限定的でながくなかったことが想定され、借用語を琉球方言の音韻体系にあわせてとりこみ、琉球方言の音韻体系を変化させるほどのものではなく、その影響はちいさかったのではないかとかがえる。しかも、古琉球から近世初期の琉球方言の音韻体系は日本語のそれとおおきな差異のなかった可能性はたかい。

いっぽう、近代以降の琉球方言と日本語の言語接触は、琉球方言の音韻体系におおきな影響をあたえている。以下のa)～f) などがある。

- a) 奄美大島方言、沖縄島北部方言などにみられる喉頭音化した子音フォネームと喉頭音化しない子音フォネームの音韻的対立の解消。

- b) 沖縄島中南部方言、北部方言、奄美大島方言における喉頭破裂音の消失。
- c) 語頭、語中においてdとrの対立をもたず、語頭でd、語中でrがあらわれる糸満方言などの沖縄島南部方言において語頭、語中におけるdとrの音韻的対立の発生。

フォネームのアロフォンの変化としては、つぎのようなものがある。d) ~f) はアロフォンの変化だが、変化が進行すると、フォネームとしてのf、v、i、ë、ɾが消失して、音韻体系の変化に移行する。

- d) 宮古方言のfのhへの変化。おなじく、va、あるいはvaのwaへの変化。
- e) 奄美大島方言において中舌狭母音iのi、uへの変化。おなじく、中舌半狭母音ëのe、oへの変化。
- f) 石垣方言の舌先母音ɾのiあるいはuへの変化。

2.1.2 琉球クレオロイドの音韻への影響

琉球クレオロイドの音韻体系、およびフォネームのアロフォンにあらわれる琉球方言の影響として、つぎのものをあげることができる。しかし、これらの影響は、標準語化=脱クレオロイド化の進行によって希薄になっているとかんがえられる。

- g) 語頭においてdとrの対立をもたずdがあらわれる糸満方言などの沖縄島南部方言母語話者の沖縄クレオロイドにおいて語頭のrがdであらわれて、dとrの音韻的対立がなくなる。
- h) 語中においてdとrの対立をもたずrがあらわれる糸満方言などの沖縄島南部方言母語話者の沖縄クレオロイドにおいて語中のdがrであらわれて、dとrの音韻的対立がなくなる。
- i) 無声歯茎摩擦音と無声歯茎破擦音において、口蓋音化した子音ʃ、tʃ、dʒと口蓋音化しない子音s、ts、dsの対立をもたない沖縄島南部方言母語話者の沖縄クレオロイドにおいて、その対立がうしなわれる。
- j) 擬声擬態語の喉頭のpが喉頭音化している奄美大島方言母語話者の奄美クレオロイドの外来語のpが喉頭音化する。
- k) 語中母音の長短の区別をもたない奄美大島南部方言母語話者の奄美クレオロイドにおいて標準語の語中短母音に対応する母音がながくあらわれ、長母音に対応する母音がみじかくあらわれる。
- l) 大神島方言母語話者の宮古クレオロイドにおける有声破裂音と無声破裂音の対立がうしなわれる。

2.2 文法への影響

音韻のばあいとおなじく、近代以前の琉球方言の文法にどのような影響があったのか、現段階では不明である。高橋俊三(1991)も指摘するように『おもろさうし』のかかれた時代には、奄美沖繩諸方言に特徴的な動詞活用「居り融合」形式はまだ発生しておらず、動詞の形態論的な特徴について本土方言(特に九州方言)との差異は、現代琉球方言と日本語との差異ほどおおくはなかったであろうとかがえる。

近代以降の言語接触は、琉球方言におおきな影響をあたえたであろうと推測するが、体系的な研究はまだないといってよいかもしれない。

2.2.1 琉球方言の文法への影響

文法体系における変化としては、主格と連体格をあらわすga格とnu格のつかいわけがなくなり、主格の用法がga格に統一され、連体格の用法がnu格に統一される現象や、沖縄方言の完成相動詞にみられた進行相的な意味の消失をあげることができるかもしれない。音韻や後述する語彙にみられる影響にくらべると、文法にみられる影響がすくないようにもかんじられるのだが、それが文法の保守性に由来するものなのか、文法研究のおくれがそう感じさせているのか判断できない。

屋比久浩(1987)は、日本語との接触のなかであらたに発生した形式をヤマトウチナーグチと名づけ、つぎのように定義している。

「ヤマトウチナーグチ」は、沖縄方言の不完全な知識しか持っていない人々が、日本語の表現の外形だけを沖縄方言に変換したためにできた言語作品をいう。その人々は、日本語による言語生活を主にしているため、この種の言語作品の例は散発的で記録に残すことが困難であり、筆者のもとにも僅かしかない。(屋比久浩1987、p.122)

屋比久浩(1987)はつぎの3例のヤマトウチナーグチをあげている。いずれも動詞と形容詞である。

「タタンヤ アタラシク トウジヤ…(暈は新しく妻は…)」

「クルマニ ヒカリーンドー(車に轆かれるぞ)」

「サキ ウサガティ マーシミソーレ(酒を召し上げて回してください)」

それぞれ「ミーク(新しく)」「クワーサリーン」「ミグラシミソーレー(回してください)」というべきところを標準語形の直訳したものになっているのだが、それぞれに対応する伝統的な方言語形があり、「アタラシク」は「大切に」、「ヒカリーン」は「引かれ

る]、「マーシミソーレー」は「亡くなってください」の意味をあらわす。このばあい、すでに存在した単語とのあいだで同音衝突をおこして不都合が生ずるのだが、琉球方言に存在しなかった語形のばあい、借用語としてうけいれられたものもあるし、意味的に不都合が生じなければ多義語として定着したものもあるだろうとかんがえる。日本語との接触が長期に、しかも全面的におこなわれているいまでは数おおく発生している可能性がたかい。

琉球方言が日本語の方言であり、その近似性ゆえに、動詞のばあい、語幹をそのままに、語尾を琉球方言の語尾にして借用される。強変化動詞は強変化動詞で、弱変化動詞は弱変化動詞で借用されるので、借用語であることが判別しにくい。先の語例では、強変化k語幹動詞（引く）が強変化k語幹動詞で、強変化s語幹動詞（回す）が強変化s語幹動詞で借用されている。この点は、日本語の漢語、外来語の動詞が主としてスル動詞でしか借用されないのとことなる。

2.2.2 琉球クレオロイドの文法への影響

接触言語としての琉球クレオロイドの文法体系、および個々の活用形にあらわれる影響は、形のちがいや文法的意味など、さまざまな面にあらわれる。日本語（本土方言）とのちがいがわかりやすく、よく研究（あるいは認識）されているものであろう。沖縄クレオロイドの文法全体についての概略は高江洲頼子（1994）を、テンス・アスペクトについては高江洲頼子（2004）、および、かりまたしげひさ（2008）を参照。

2.3 語彙への影響

2.3.1 琉球方言の語彙への影響

本土方言から琉球方言への語彙の借用にさいして、つぎのことがあったと想定される。近代以前の借用語には（イ）（ロ）の2タイプがあったが、のちにおきた琉球方言内での音韻変化が適応されたとかんがえる。（ハ）を確認することはむづかしいが、伊波普猷（1935）のつぎの記述からうかがえる。

『小学』の素読に写つたが、その訓読は漢文直訳体の一斉点でもなく、又極端な和文体の道春点でもなく、両者の中間をいつた後藤点であつた。中には之を琉球語の音韻法則によつて、オ列エ列をウ列イ列にしたり、ウ列イ列を口蓋化したりして読む人もあつたが、それには島開合しまかいがうといつて、冷笑してゐた…（伊波普猷全集第8巻p.570）

近代以降には、すくなくとも、屋比久浩（1987）がヤマトウウチナーグチとよぶ現象があり、（ハ）のおこなわれていることがわかる。ヤマトウウチナーグチについては、2.2.1で詳述する。

- (イ) 両語の音韻体系の近似性から日本語の語形をそのまま借用
- (ロ) 母方言の音韻体系にあわせて日本語の語形を変更して借用
- (ハ) 両語間にみられる音韻対応を適応させて、母方言の語形らしく変更して借用

(ロ) は、日本語における漢語や外来語にもみられる現象で、言語によっては (イ) のような外来語をもつばあいもあるだろうが、(ハ) は、琉球方言が日本語の方言であり、両者の近似性が可能にした現象であろう。詳細はつぎの「3節 語種にみる言語接触」のべる。

2.3.2 琉球クレオロイドの語彙への影響

琉球クレオロイドの語彙にあらわれる琉球方言の影響は、つぎの点があげられようか。なお、沖縄クレオロイドの単語の例は、高江洲頼子 (1994) に豊富に提示されている。

- (ニ) 琉球方言の語形をそのまま使用
- (ホ) 琉球クレオロイドの音韻体系にあわせて琉球方言の語形を変更して使用
- (ヘ) 琉球方言の単語の意味をもちこむ
- (ト) 両語間にみられる音韻対応を適応させて、日本語らしく変更して使用
- (チ) 琉球方言の造語法を利用した新語の生成

上記 (ニ) には語形をそのままもちこめる「ゴーヤー」「サーターアンダギー」「ガジマル」「カタブイ (片降り)」などの名詞や「アガ (あ痛)」「アゲ (あれ)」「アイジャ (あれ)」などの感動詞、擬声擬態語がある。琉球方言を母語にする高齢話者が琉球方言の語形を琉球クレオロイドにもちこむとき、琉球方言の語形 (たとえば /?wa:/ (豚)、/?ju:/ (魚)、/?ja:/ (君) など) をそのままもちこむこともある。琉球方言からもちこまれる単語は、日本語では表現できない地理的、文化的に琉球列島に固有の事物や概念をあらわす単語がおおい。これらは漢語や外来語が日本語にとりいれられているのとおなじである。

上記 (ホ) は、(ニ) の変種とみることもできる。(ホ) は、とくに、琉球方言を十分にはなせないわかい世代の琉球クレオロイドにもあられ、前節「2.1.2 琉球クレオロイドの音韻への影響」でしめしたような現象以外にもあるとかんがえるが、稿をあらためて詳述する必要がある。

「アザ (ほくろ)」の語形がおなじであることから、琉球クレオロイド「あざ (痣)」に「ほくろ」の意味がもちこまれ、「アザ (ほくろ、痣)」が多義的な単語になったり、「クブスン (溢す)」に液体をすてるという意志動詞としての意味を琉球クレオロイドの「コボス」にもちこんで多義的にしたりするなどが上記 (ヘ) にふくまれるだろう。

「ウチアメ（内雨）」「ウリズン」などが上記（ト）には相当する。あるいは、「ホガス（穴をあける）」「ホゲル（穴があく）」が琉球方言の「フガスン」「フギーン」などからつくられたものもここにはいる。

近代以降、長期にわたって日常生活のあらゆる場面で日本語との言語接触がつづき、琉球方言と琉球クレオロイドのバイリンガルの話者が増加し、社会的にも二言語が併存する状況で、琉球方言の標準語化と琉球クレオロイドの脱クレオロイド化＝標準語化とが進行している。話しことばとしてしか存在しない琉球方言にとって、話しことばと書きことばの両面からうける日本語の影響は深刻である。

琉球方言と琉球クレオロイドが並存しているなかで、琉球方言にみられる上記の（イ）～（ハ）の日本語由来の語彙や、琉球クレオロイドにみられる（ニ）～（ト）の琉球方言由来の語彙を借用（借用語）としてみるのではなく、琉球方言と琉球クレオロイド（＝日本語）の語彙がたがいに共有されていて、それを自由にだしいれしているとみることでもできる。語彙も社会に蓄積されたものとして存在していることをみとめるなら、琉球方言と琉球クレオロイド（＝日本語）の併存状況は、語彙の共有というかんがえを可能にする。

言語構造や体系のおおきくことなる言語間で語彙が共有されるということをかんがえるのはむつかしいかもしれない。しかし、琉球方言と日本語（琉球クレオロイド）は、祖語を共通にして言語構造のいろいろな面で近似しているだけでなく、その単語の音声形式にちがいはあっても、ほとんどが共通の単語で、なおかつその語彙的な意味もおなじくしていることが基礎にあって、相互に語彙を共有するのではないだろうか。

3. 語種にみる言語接触

日本語あるいは本土諸方言、あるいは中国語や英語などの外国語の影響は、琉球方言の語彙体系に借用語としてあらわれる。

古代中国語から日本語への借用語を漢語とよび、それ以外の外国語から日本語への借用語を外来語とよぶ。漢語は、古代中国語から借用されたものをさし、おおくは漢字でかかれる。のちの時代に中国語から借用された単語は、外来語に分類されてカタカナでかかれる。和語は、日本語本来の単語である。和語、漢語、外来語とよばれる、単語の出身のちがいによる分類を人間の「人種」になぞらえて、「語種」とよぶ。和語、漢語、外来語という語種の分類は、日本語独特のものである。

琉球方言には、中国語から直接とりいれた借用語もあるが、日本語をとおしてとりいれた借用語もある。後者は一般には漢語と呼ばれているもので、前者を後者から区別する用語はない。しかし、日本語をとおして琉球方言に借用された漢語と、中国との交流のなかで中国語から直接借用された漢語は、琉球方言内でのふるまい方がことなるので、両者を区別しておく必要がある。

語種の分類とかかわって、外来語がどの言語から借用されたのかを問題にすることがある。借用語のもとになった単語がもともとは借用先の単語ではなく、別の国のことばであったものが借用先の言語をとおして輸入されることがある。日本語に直接何語からとりいれたかというとき、それを原語とよぶ。語源がもともと何語であったかというものである。

外来語が何語からはいったかということについては、その「原語」と「語源」とを区別しなければならない。ここで「原語」とよぶのは、日本語に直接何語からはいったかということであり、「語源」というのはもともと何語に属していたことばかということである。たとえば、「タバコ」の原語はポルトガル語だが、そのもとをただすと西インド諸島のハイチ島のことばだった。(教科研東京国語部会1964、p122)

本稿では、中国語以外の外国語由来の借用語を外来語とよび、日本語からとりいれた漢語を日本漢語、中国語から直接とりいれた漢語を中国漢語とよんで両者を区別することにする。日本漢語は、日本語からの借用語であり、原語は日本語で、語源は中国語ということになる。琉球方言が中国語から直接とりいれた借用語を外来語とよぶこともできるが、琉球国と中国との交流の歴史を考慮して上記の名称を暫定的に採用しておく。

日本漢語、中国漢語、外来語以外の単語のなかに、ある地域に独自の語形をもつ単語、独自の概念をあらわす単語がある。このような単語を「俚語」とよぶことにする。俚語のなかには鹿児島方言をふくむ九州方言に共通するもの、琉球方言全体に共通するもの、琉球方言の特定の下位方言にみられるものがある。日本漢語、中国漢語、外来語、俚語をのぞいた、日本語諸方言にひろく共通にみられる単語を共通和語とよぶことにする。

(1) 和語

共通和語

俚語

九州共通俚語

琉球共通俚語

地域俚語

(2) 漢語

日本漢語

中国漢語

(3) 外来語

これらの語種は新旧の層をなす語群として琉球方言、琉球クレオロイドに存在している。

共通和語も、祖語から分岐したときから保有していたものもあれば、分岐後のながい交流のなかでとりいれられたものもあるだろう。しかし、それがふるい時代のものであれば、琉球方言のなかでおきた音韻変化が適応されて、新旧の区別がつかなくなっている。しかし、とりいれられた時代があたりしければ、借用される以前におきた音韻変化が適応されず、結果として、それが分岐後にとりいれられたものであることがわかるばあいもある。

近代以降にとりいれられた単語は、和語も漢語も外来語も音韻変化しない標準語形がそのままとりいれられている。琉球方言が日本語の方言であり、その文法構造、とくに形態論的な語形変化のしかたが本土諸方言のそれと近似することから、名詞や第二形容詞の借用がきわめて容易になされる。名詞は、琉球方言の固有の格助詞やとりたて助詞を後接させれば容易にとりこめるし、名詞や第二形容詞を述語にするときは、くみあわせるコンピュータを琉球方言のコンピュータにすればよいのである。

3.1 和語

琉球方言にみられる和語系の単語は、日本祖語からうけついでいるものと、ながい交流のなかで分岐後にとりいれたもの⁶⁾とがあるが、近代以降の借用語が標準語形をそのまま借用しているのに対して、近代以前に借用された和語は、琉球方言内でおきた音韻変化が適用されて琉球方言に同化して、ほとんど見分けがつかないだろう。

3.1.1 共通和語

琉球方言の単語には、ティー（手）、ミー（目）などの身体語彙、ウヤ（親）、ンマガ（孫）、ムーク（婿）、ユミ（嫁）などの親族語彙、カジ（風）、クム（雲）、チチ（月）、フシ（星）などの自然関係語彙、ターチ（二つ）、ミーチ（三つ）、ユーチ（四つ）、ナナチ（七つ）、トゥー（十）などの数詞があり、これら基礎語彙のほとんどが日本語と共通していて、日本祖語にさかのぼる。これら琉球方言の基礎語彙は共通和語である。

日本祖語からひきついだとかんがえられる共通和語のなかには、クビ（首）、ミミ（耳）、ヤマ（山）のように現代日本語とほぼおなじに発音される単語もあれば、チム（肝）、ミジ（水）、カジ（風）、フシ（星）のように音韻変化の結果、形式がことなっているものもある。下位方言のなかには、はげしい音韻変化の結果、語源を共通にするようにはみえない共通和語も存在する。

トゥジ（妻）、シシ（肉）、ウトウゲー（下あご・頤）、アジ（あぎ・上顎、鰓）、フグイ（陰囊）、チトゥ（苞・土産）、カコー（かかふ・ぼろ布）、イミ（いめ・夢）などのように、ふるい日本語にはあって、現代日本語ではつかわれなくなっているのに、琉球方言に保存され使用されている単語・語形も存在する。

6 国立国語研究所編（1963）に文語として記された「haru（春）」「?aci（秋）」など。

近代以降の言語接触のなかで借用された和語は、標準語形をそのままとりいれている。和語にかぎらず漢語も外来語も近代以降に日本語からとりいれられた単語は、標準語形のままである。

3.1.2 俚語

先述したが、俚語のなかには九州方言と共通のものがあるし⁷、琉球方言全体に共通するもの、特定の下位方言に固有のものがある。

3.1.2.1 九州方言共通俚語

九州共通俚語のなかには、日本祖語（あるいは九州琉球祖語）から分岐したときから保持しているものと、分岐後の交流のなかで琉球方言にもちこまれたものがある。両者を区別することはむづかしい。

チューカー（急須）は鹿児島方言のチョコがはいってきたものである。ゴーヤー（ニガウリ）も鹿児島方言のゴイ（瓜類、あるいは、ニガウリ）がもとになっている。チキアギ（薩摩揚げ、つけあげ）もおなじ。ニーシェー（青年）も鹿児島方言のニセ（青年・ニオ^{にさい}）がもとになっている。ティーダ（太陽。天道^{てんどう}から）も、琉球国時代の交流の直接の窓口であった鹿児島からはいってきたであろうと推定される。その他のおおくの日本語が薩摩をとおして那覇や首里を経由して琉球方言にもはいってきたとかがえられる。

3.1.2.2 琉球方言共通俚語

ティーダ（太陽。天道^{てんどう}から）は、漢語であるにもかかわらず、琉球方言全体に共通する俚語である。ガジマル（ガジュマル）、アダニ（あだん）、ユーナ（オオハマボウ）、クバ（びろう）、ハブ（ハブ、蛇）、アマン（ヤドカリ）、シキリ（ナマコ）などは亜熱帯固有の動物や植物の名称で、琉球方言全体に共通する俚語である。'ウナイ（姉妹）、'イキー（兄弟）の親族名称は、琉球方言全体に共通の俚語で、本土諸方言にはない概念をあらわす。ウエーク（權）も琉球方言全体に共通にみられる俚語である。

これら琉球方言に固有の俚語、あるいは、下位方言に固有の俚語が基層語からうけつがれたものなのか、あるいは、南九州にあった祖方言からうけついだ琉球方言祖語にさかのぼるものなのか、それぞれの下位方言で独自に発生させたものなのかなどについては不明である。基層語を特定する作業が可能であるとすれば、琉球方言に固有の俚語であり、かつ亜熱帯固有の動植物名の名称を周辺言語と比較することが有効であろう。

7 くわしは野原三義（1980～1986）を参照。

3.2 漢語

3.2.1 日本漢語

明治以前の日本本土のながい交流のなかで借用された日本漢語が数おおくある。ティーダ（太陽・天道）、ドゥー（胴）、ドゥーテー（胴体）などの基礎語彙、ルクジュー（六十）、クジュー（九十）、ヒャーク（百）、シン（千）などの数詞、グニン（五人）、ルクニン（六人）など5人以上の人数をあらわす単語や、ハンブン（半分）、イッピュー（一俵）、イッス（一升）、グンゴ（五合）などの数量をあらわす単語、チャー（茶）、チャワン（茶碗）、ウチャトー（お茶湯）、サーター（砂糖）、トーフ（豆腐）、ヤックァン（薬缶）、ティンジョー（天井）、ティンシー（天水）、ジール（いろり・地炉から）、ハンドゥーガミ（水甕・飯銅甕から）などのおおくの日本漢語がとりいれられている。名詞だけでなく、ニジーン（堪える・念ずる）、シジーン（煎ずる）などの動詞も日本語からとりいれられている。

3.2.2 中国漢語

中国との交流をとおして中国語からはいつてきた中国漢語について上村幸雄（1963）は、つぎのようにのべる。

今日まで残っているものの数はせいぜい百内外のものと思われる。たとえば次のようなもので、中でも食品、衣料関係の語、その他文化的な語が多く、基本語はほとんどない。
（上村幸雄1963、p.22）

上村幸雄（1963）が指摘するように、中国漢語には基本語（=基礎語彙）がほとんどない。また、中国漢語のおおくは、首里方言、那覇方言では使用されるが、地方の方言にはみられない。日本漢語が基本語にまではいりこんでいるものがあること、地方の方言にまで浸透していることは、おおきく相違する。

nuNkuu暖鍋（料理名）、saakuu沙鍋（土鍋）、poopoo餠餠（料理名）、sjaNpiN香片（茶の名）、sjuNsii筍子（ほしたけのこ）、riNgaN龍眼（植物名）、ritoopN李桃餅（菓子名）、taawaN大碗（碗の一種）、tuNhwaN豚飯（料理名）、seejaNpuu西洋布（紡績による綿布）、maakwaa馬掛（着物の名）、tiNgaacuu天鵝絨（びろうど）、tuNbjaN桐板（布地の名）、taahwaakuu打花鼓（久米村の楽劇）、sjuNsii筍子（ほしたけのこ）、suucee秀才（久米村の中国帰化人子孫の青年）、haicee海賊、ciisiNbjuu啓聖廟、hweeree億懶（強盗）、ciisiNbjuu啓聖廟、suucuumaa数籌碼（絵文字の一種）、jaNziN洋銀（ニッケル）、ciNkuNsiN進貢船、ceQkuNsiN接貢船、kwaNhwa漢話（北京語）、hwikiN北京（中国地名）、hucaN福建（中国地名）、kwaNtuN広東（中国地名）（上村幸雄1963、p.22）

上記以外にもあるが、ウッチン（ウコン）、ヒンブン（屏風）なども中国漢語の可能性はあるが、検討を要する。ウッチンには名護市幸喜方言でウキヌー、宮古島市平良下里方言ウキャン、宮古島市城辺保良方言ウキンなどの語形の地域差があるし、ヒンブンには名護市幸喜方言でピンブン、宮古島市平良下里方言ツンブンなどの地位差がある。

3.3 外来語

琉球方言に借用されている外来語は、こまかく分類すると、①琉球国時代、もしくは明治期のはやい時期に本土方言を介してもちこまれたもの、②近代以降、とくに戦後になって本土方言（標準語）を介してもちこまれたもの、③戦後の米軍占領期に英語からもちこまれたものの、みつつにわけられる。①にはタバク（タバコ）、チシリ（煙管）、サフン（石鹼）、カシティラ（カステラ、蒲鉾の一種）などがあり、琉球方言内部の音韻変化の適用をうけている。②は近代以降の標準語教育や本土方言との接触のなかでとりこまれたもので、時代があたりしくなるほどに標準語形そのままの形であられる。つぎにしめた③の語例は、米軍人の英語を介してとりいれられ、英語の発音を反映した語形であられるという特徴がある。②③は琉球クレオロイドにももちこまれている。

アイスワラー（冷水）、トゥーナ（ツナ缶）、ストゥー（シチュー缶）、コーヒーシャープ（食堂）

和製外来語に似たつぎのような琉製外来語もある。

カルテックス（給油所、米国カルテックス社の給油所名から）、ワシミルク（練乳、EAGLE印の缶のデザインから）

4. 日本漢語の琉球方言内での音韻変化

近世以降に琉球方言にはいった借用語は、琉球方言でおきたさまざまな音韻変化の順序や時期を特定するうえで重要なカギをにぎっている。琉球方言でおきた音韻変化の多様さ、はげしさ、複雑さが下位方言ごとにことなることは、近世以降に借用された単語の音韻変化をみることによって、音韻変化の時間差や借用された時期の特定、ひいては音韻変化の時期の特定につながる。和語のばあい、それが日本祖語から継承されているものか、のちの時代に借用されたものか見わけがつきにくい。しかし、日本漢語のばあい、琉球方言に借用された時期がことなるとしても祖語にはさかのぼらない。日本漢語にみられる音韻変化の分析をとおして、琉球方言でおきた音韻変化の順序や時期を検討することが可能ではないかとかんがえる。

4.1 音韻変化の順序

宮古方言でjaf (厄) saĵaf (細工、大工) などの漢語の*kuはfに変化した語形があらわれているが、duku (毒)、pja:ku (百) の*kuはfに変化せずkuのままの語形があらわれている。宮古方言にとりいれられた時期のちがいをしめしているのだろう。

仏教用語の漢語で、本尊への供物や住僧の食事の調理などをする建物、あるいは、寺で住職や家族などの住む所、仏殿、本堂に対する僧房、厨房の総称などをあらわす「庫裡 (くり)」に対応するとかんがえられる宮古島市平良下里方言の語形は、ku:zである⁸⁾。この語形は、宮古方言で*ku>fの変化ののちに借用されたものであることと同時に、*ri>zの変化の前に借用されたものであることが想定される。そして、宮古方言では*ku>fの変化が先におこり、*ri>zの変化があとでおこったことがわかる。

おなじ単語の今帰仁方言の語形はk'uiである。今帰仁方言のばあい、*ku>k'u、*ko>huがみられるのでk'uiが期待されるのだが、実際には、k'uiである。したがって、この語形は、宮古方言のku:zとおなじく*ko>hu、*ku>k'uの変化ののちに借用されたのではないかとかんがえられる。しかも今帰仁方言でおきた*ri>iの変化が適応されているので、*ri>iの変化のまえに借用されていることがわかる。この点も宮古方言のばあいに似ている。

「烏賊の墨」の意をもつ今帰仁方言のk'uri、宮古方言の𑄀、八重山方言の𑄀𑄀⁹⁾は、「水の底によどむ黒い土」の意の「涅 (くり)」に対応するとかんがえられるものである。古代日本語では「庫裡」とおなじ語形をもつが、「庫裡」とはことなり、いずれの下位方言も期待どおりの語形があらわれている。和語系の「涅」は祖語にさかのぼる可能性がある一方で、漢語系の「庫裡」があたらしい借用の可能性がたかく、琉球方言にとりいれられた時期のちがいが語形のちがいに反映しているのであろう。

4.2 音韻変化の時期

琉球方言の下位方言では、それぞれに特徴的な音韻変化がおきていて、おおきな方言差をうみだしている。下位方言に借用された日本漢語の語形にあらわれる方言差を検討し、借用された時期を特定できれば、音韻変化の時期を想定することができる。

沖縄島以南の沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言では*awa>aの変化がおきている。

na: (縄)、ka: (皮)、ka: (井戸・<川)、ta:ra (俵)、sa:ra (鱈・魚名)

8 ニコライ・A・ネフスキーの手書きノート「宮古諸島の語彙研究のための資料」(早稲田大学附属図書館所蔵マイクロフィルム)の記載語形による。平良方言で「室、部屋」の意。多良間方言ではku:l、八重山方言ではkuru。

9 石垣四箇方言の𑄀𑄀は母音に変化があつてわかりにくい、複合語の𑄀𑄀iuru (黒色)は対応も語形変化もわかりやすい。

いっぽう、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、喜界島の奄美諸島のばあい、*awa > oの変化がおきている。

no (縄)、ko (皮)、ko (井戸・<川)、to:ra (俵)、so:ra (鱈・魚名)¹⁰

語形のちがいがみられるふたつの地域を区分する有意な境界線が1609年の薩摩藩の琉球侵略による奄美諸島割譲によってひかれたものだとするならば、17世紀前半までは、*awaのwはまだ消失しておらず、奄美沖繩祖方言の語中wは完全には消失していないとみるのが穏当だろう。したがって、奄美沖繩諸方言と宮古八重山諸方言が分岐する以前の琉球祖語では*awaのwの消失(沖繩島以南の方言)、wの融合(与論島以北の奄美諸島の方言)はおきていないとみることができる。1609年の薩摩侵略後ただちに、奄美諸島の方言で*awa > oがおき、沖繩以南の諸方言でwが消失するのではなく、一定期間をへておきるものだとみるならば、aと結合するwが消失するのは、17世紀半ばあるいは18世紀以降ではなかろうか。

漢語由来の移入語の「茶碗」は、奄美沖繩諸方言のおおくの下位方言でtjawaNである。このことは、奄美諸島の方言では*awa > o:の同化が完了したあとの移入語であり、沖繩諸島の方言ではawa > a:のw消失が完了した後の移入語であることを示唆している。そうでなければ、tjo:Nやtja:Nなどの語形になっているはずである。tjawaN(茶碗)の借用は17世紀以降、おそらく18世紀以降ではなかろうか。

石垣島白保方言の[jaban](茶碗)も、他の宮古八重山諸方言のtjaban(茶碗)も¹¹それが移入されたのは、awa > a:の変化以降であり、しかも宮古八重山諸方言で*w > bがおきるまえだろう。それが沖繩を経由してもちこまれたのであれば、奄美沖繩諸方言でawa > o:、awa > a:の変化が終了した17世紀半ば、18世紀以降であろう。そして、*w > bがおきたのも17世紀半ば、18世紀以降ということになるであろう。白保方言のtja > jaの変化もそれ以降である。

追記：本稿は文部科学省科学研究費基盤研究(B)課題番号23320140「近世琉球社会における言語運用の諸相に関する総合的研究」(代表者：高良倉吉)の研究成果の一部である。

参考文献

伊波普猷(1935)「チエムバレン先生と琉球語」『国語と国文学』第12巻第4号。『伊波普猷全集第8巻』平凡社1975に所収。

10 語例は、鹿児島県大島郡龍郷町瀬留方言。話者はM1930年生。菊千代・高橋俊三(2005)でも、「no: (釣り縄)」「ho: (皮)」「tora (俵)」「sora (サワラ・魚名)」。

11 かりまた(1999)は、宮古諸方言の語頭wの破裂音化、語中wの消失(ハ行転呼音)、漢語由来「茶碗」などの語例からw > bの変化について詳述している。

- 上村幸雄（1993）「琉球列島の言語・総説」『言語学大辞典』第4巻下巻、三省堂
- 上村幸雄（1963）「琉球方言概説」『沖縄語辞典』国立国語研究所、大蔵省印刷局
- かりまたしげひさ（2010a）「琉球クレロイドの性格」『コンタクトゾーンとしての島嶼共同体－言語、アイデンティティ、ジェンダー、環境－』、采流社。
- かりまたしげひさ（2010b）「西原町の方言の単語」『西原町史言語編』、西原町教育委員会
- かりまたしげひさ（2009）「琉球語の $\phi > p$ の可能性をかんがえる－中本謙「琉球方言のハ行子音p音」への問い－」『沖縄文化』105号、沖縄文化協会
- かりまたしげひさ（2008）「トン普通語・ウチナーヤマトウグチはクレオールか－琉球・クレオール日本語研究のために－」『南島文化』30号、沖縄国際大学南島文化研究所
- かりまたしげひさ（2006）「沖縄若者ことば事情－琉球・クレオール日本語試論」『日本語学』1月号、明治書院。
- かりまたしげひさ（2004）「九州方言と琉球方言のはざまで－トカラ方言の位置を考える－」『琉球と本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけに関する総合的研究』平成13年度科研費成果報告書、琉球大学。
- かりまたしげひさ（1999）「音声の面からみた琉球諸方言」言語学研究会編『ことばの科学』第9号、むぎ書房。
- かりまたしげひさ（1994）「話しことばの実態－沖縄における言語状況（断想）－」『国文学解釈と鑑賞』第59巻1号、至文堂。
- 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』武蔵野書院。
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1964）『語彙教育－その内容と方法』むぎ書房。
- 国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 新城和博（1990）「君が喋るうちなーぐち」『沖縄キーワードコラムブック日記版』沖縄出版。
- 高江洲頼子（2004）「ウチナーヤマトウグチ－動詞のアスペクト・テンス・ムード」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて』ひつじ書房。
- 高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトウグチ－その音声、文法、語彙について」『沖縄言語研究センター研究報告3 那覇の方言 那覇市方言記録保存調査I』沖縄言語研究センター
- 高木千恵（2010）「標準語との接触による地域語の変容」『日本語学』第29巻第14号11月臨時増刊号、明治書院。
- 高橋俊三（1991）『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院。
- 高橋俊三（1991）『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院。
- ニコライ・A・ネフスキー「宮古諸島の語彙研究のための資料」（早稲田大学附属図書館所

蔵マイクロフィルム)、平良市教育委員会編『ネフスキーノート』として写真版が刊行されている。

野原三義 (1980~1986) 「琉球方言と九州諸方言との比較」(『沖縄国際大学文学部紀要 (国文学篇)』第8巻第1号~第12巻3号)

服部四郎 (1955) 「沖縄方言の言語年代学的研究」『民族学研究 (19-2)』民族学振興会

宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社

屋比久浩 (1987) 「ウチナーヤマトウグチとヤマトウチナーグチ」『国文学解釈と鑑賞』第52巻7号、至文堂。

ロング・ダニエル (2009) 「第二言語習得理論と言語接触論から見たウチナーヤマトウグチ」